

海外の畜産物の需給動向

牛肉

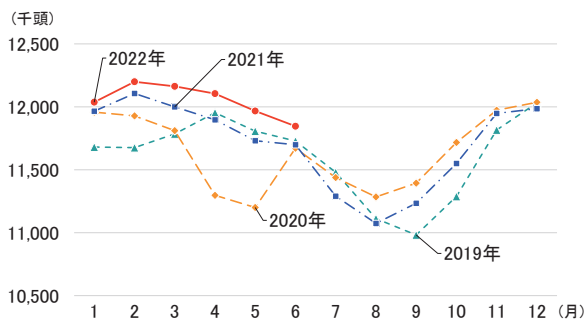
米国

1～4月の牛肉輸出量、中国と台湾向けが大幅に増加

フィードロット飼養頭数は引き続き高水準

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年5月のフィードロット導入頭数は186万9000頭（前年同月比2.1%減）、出荷頭数は191万4000頭（同2.4%増）となった。その結果、22年6月1日時点のフィードロット飼養頭数は1184万6000頭（同1.3%増）となり、季節変動として減少傾向にあるものの、1月以降は前年同月を上回る高い水準で推移している（図1）。

図1 フィードロット飼養頭数の推移



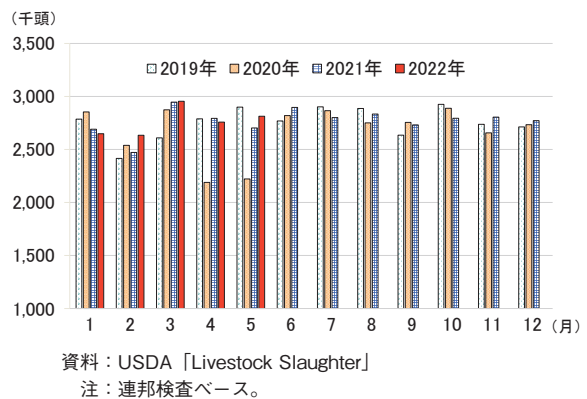
資料：USDA「Cattle on Feed」
注1：1000頭以上規模のフィードロットが対象。
注2：各月1日時点。

牛と畜頭数は前年同月から増加

USDA/NASSによると、2022年5月のと畜頭数は、継続する干ばつの影響による牧

草生育状況の悪化や燃料費、肥料費の高騰による経営圧迫から牛群縮小の動きが強まっていることで、281万4000頭（前年同月比4.1%増）となった（図2）。また、5月の週間と畜頭数は13年来の高水準に達するなど、食肉処理場のと畜・加工処理量はパンデミック以前の水準にまで回復している。これにより、22年5月の牛肉生産量は103万7678トン（同3.3%増）とやや増加した。

図2 牛と畜頭数の推移



中国・台湾向け輸出の増加が顕著

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年4月の牛肉輸出量は13万7881トン（前年同月比5.9%増）と堅調に推移している（表）。

主要輸出先別に見ると、最大の輸出先である日本向けは、昨年4月16日まで発動され

ていたセーフガードによる輸出減の反動などから3万2041トン（同8.2%増）とかなりの程度増加した。また、中国向けは、上海でのロックダウンによる需要停滞の影響があった中で、2万4249トン（同7.7%増）と当初の予測に反し増加し、1～4月の累計では前年同期比42.5%増となった。さらに台湾向けは、現地の好調な食肉需要を背景に、単月としては過去最高となる1万510トン（前年同月比40.3%増）を記録し、特に価格の高い冷蔵牛肉の輸出が好調なことから、輸出

市場としての価値が一層高まっている。このほか、フィリピン向けが3146トン（同86.0%増）、インドネシア向けが3045トン（同200.3%増）などASEAN諸国向けの輸出量が記録的ペースで増加している。このような状況について米国食肉輸出連合会（USMEF）は、「最近のインフレやドル高で推移する為替相場、物流面の混乱が米国産牛肉輸出にとって逆風となる中で、アジア圏をはじめとする外食産業の需要回復が輸出を過去に例がないほどに伸ばしている」としている。

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 (増減率)	シェア	2022年	前年同期比
					(1～4月)	(増減率)
日本	29,607	32,041	8.2%	23.2%	116,409	▲3.6%
韓国	30,499	28,765	▲5.7%	20.9%	123,502	4.6%
中国	22,517	24,249	7.7%	17.6%	90,218	42.5%
カナダ	10,339	10,123	▲2.1%	7.3%	39,729	▲0.8%
メキシコ	11,786	9,319	▲20.9%	6.8%	39,188	▲23.5%
台湾	7,490	10,510	40.3%	7.6%	36,270	44.0%
フィリピン	1,691	3,146	86.0%	2.3%	6,829	5.4%
インドネシア	1,014	3,045	200.3% (約3.0倍)	2.2%	7,007	76.0%
その他	15,280	16,683	9.2%	12.1%	62,378	▲0.0%
合計	130,223	137,881	5.9%	100.0%	521,531	6.1%

資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]
注：枝肉重量ベース。

（調査情報部 伊藤 瑞基）

豪州

牛群再構築は継続も、肉牛取引価格は大幅下落

牛飼養頭数は増加も、労働力不足が引き続き課題

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）は2022年6月、最新の牛肉生産量などの見通

しとなる「Industry projections 2022-June update」を公表した（表1）。

これによると22年の牛飼養頭数は、肉牛生産地の多くが降雨に恵まれ、飼料確保が容易となったことで牛群再構築がさらに進むこ

とから、2758万3000頭（前年比5.6%増）と増加が見込まれている。また、24年には2886万6000頭まで増加するとしている。22年の成牛と畜頭数は、豪雨による家畜輸送の停滞や、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による食肉処理施設の稼働率低下を受け、615万頭（同2.2%増）と前回公表（22年2月）よりも下方修正された。MLAによると、依然として豪州国内の労働力不足が食肉処理施設の稼働率に影響を及ぼしているが、国境の開放に伴う移民ビザの発給が加速することで、労働力不足の解消が期

待されるとしている。ただし、新規従事者の研修に最大8カ月を要することから、当面の間、稼働率の回復が牛肉生産の課題としている。また、22年の牛肉輸出量は、牛肉生産量が低調にあることや、世界的な物流の混乱が影響したことで、94万トン（同5.9%増）と前回公表から下方修正された。

24年の見通しとして、これらの課題が徐々に解消に向かうことで、と畜頭数は740万頭、牛肉生産量は231万トンに達すると予測している。

表1 牛肉生産量などの見通し

項目	2020年	2021年 (今回見込値)	2022年 (今回予測値)	前年比 (増減率)	2023年 (今回予測値)	2024年 (今回予測値)
牛飼養頭数（千頭）	24,621	26,111	27,583	5.6 %	28,703	28,866
成牛と畜頭数（千頭）	7,145	6,018	6,150	2.2 %	6,850	7,400
牛肉生産量（千トン）	2,103	1,883	1,968	4.5 %	2,175	2,309
1頭当たり枝肉重量（キログラム）	294.3	313.0	320.0	2.2 %	317.5	312.0
牛肉輸出量（千トン）	1,039	888	940	5.9 %	1,065	1,140
生体牛輸出（千頭）	1,049	772	500	▲ 35.2 %	530	640

資料：MLA「Industry projections 2022-June update」

注1：牛肉生産量は枝肉重量ベース。牛肉輸出量は船積重量ベース。

注2：子牛および子牛肉を除く。

注3：2021年は見込値。2022年以降は予測値。

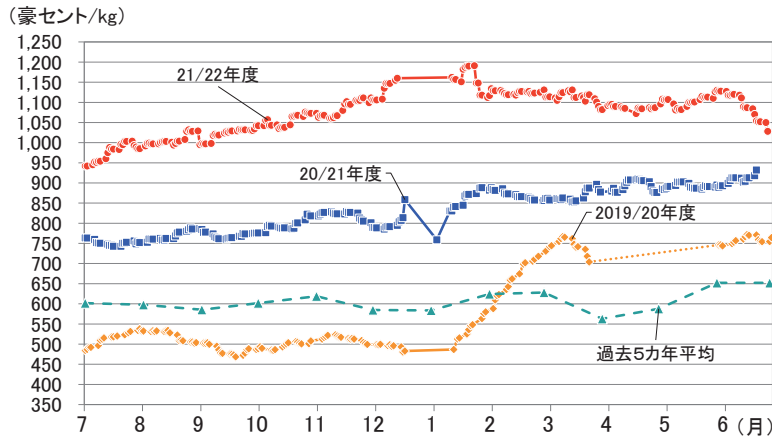
肉牛価格は6月に入り大幅に下落

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、2022年6月に入って大幅に下落し、同月28日時点で1キログラム当たり1028豪セント（986円：1豪ドル＝95.90円^{（注）}）と21年9月以来の水準になった（図）。一方、現地報道によると、

中長期的な価格見通しとして、牛飼養頭数が回復する中で、牧草の生育に良好な天候が継続し、安定した需要が見込まれることから、今後2～3年の間はEYCI価格が同1000豪セント前後で推移する可能性があるとする研究機関の報告が紹介されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

図 EYCI価格の推移



資料：MLA

注1：年度は7月～翌6月。

注2：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部3州（クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

注3：2020年3月26日～6月1日の間は、新型コロナウイルス感染症の影響でEYCI価格の集計を実施していない。

牛肉輸出量、日本向けは増加

豪州農業・水・環境省（DAWE）によると、2022年5月の牛肉輸出量は7万9995トン（前年同月比4.6%増）とやや増加した（表2）。現地報道によると、輸出市場では世

界的な物流の混乱によりコンテナの確保が引き続き困難な状況にあり、物流や港湾の安定的な操業が課題であるとされている。このような中で、同月の日本向けは2万5606トン（同17.1%増）と大幅に増加し、前月比でも約1.8倍に増加している。

表2 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年 5月	2022年 5月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～5月)	
				前年同期比 (増減率)	
日本	21,865	25,606	17.1%	86,002	▲ 5.4%
中国	13,792	13,599	▲ 1.4%	59,122	▲ 2.1%
韓国	13,018	13,220	1.5%	56,917	▲ 10.6%
米国	11,560	10,992	▲ 4.9%	47,873	▲ 9.8%
東南アジア	7,601	7,967	4.8%	32,007	▲ 20.0%
中東	2,263	2,637	16.5%	10,286	▲ 17.9%
E U	639	811	27.0%	3,161	▲ 9.5%
その他	5,760	5,162	▲ 10.4%	23,553	▲ 4.9%
輸出量合計	76,499	79,995	4.6%	318,922	▲ 8.6%

資料：DAWE

注1：船積重量ベース。

注2：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。

注3：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラース・アル＝ハイマ）の合計。

（調査情報部 国際調査グループ）

豚 肉

米 国

豚肉小売価格の上昇により豚肉需要減少

飼養頭数の減少は継続

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年6月1日時点の豚総飼養頭数は7252万4000頭（前年比0.9%減）となり、前回の報告に引き続き前年同期を下回った（表1）。一方、7月中旬から8月中旬に市場へ出回ると予測される120～179ポンド（54～81キログラム）の

肥育豚頭数は同0.7%減、8月末から10月初めに市場に出回ると予測される50～119ポンド（23～53キログラム）の肥育豚頭数は同0.6%減と、ともにわずかな減少となっている。カナダからの生体豚輸入は増加傾向にあるものの、米国の豚肉供給に影響を与えるほどの頭数ではないことから、今後、夏から秋にかけての豚肉供給量は、前年をやや下回ると予測される。

表1 豚飼養頭数の推移

（単位：千頭）

	2020年	2021年	2022年	前年比 (増減率)
総飼養頭数（6月1日時点）	77,664	73,153	72,524	▲ 0.9%
繁殖豚	6,426	6,220	6,168	▲ 0.8%
肥育豚	71,238	66,933	66,356	▲ 0.9%
50ポンド（23キログラム）未満	22,100	21,354	21,083	▲ 1.3%
50～119ポンド （23～53キログラム）	19,890	18,919	18,811	▲ 0.6%
120～179ポンド （54～81キログラム）	15,730	13,830	13,737	▲ 0.7%
180ポンド（82キログラム）以上	13,517	12,829	12,725	▲ 0.8%
分娩母豚頭数（3月～5月）	3,132	3,034	2,992	▲ 1.4%
産子数（3月～5月）	34,455	33,233	32,905	▲ 1.0%
1腹当たり産子数（3月～5月）（頭）	11.00	10.95	11.00	0.5%

資料：USDA「Hogs and Pigs」

注1：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。

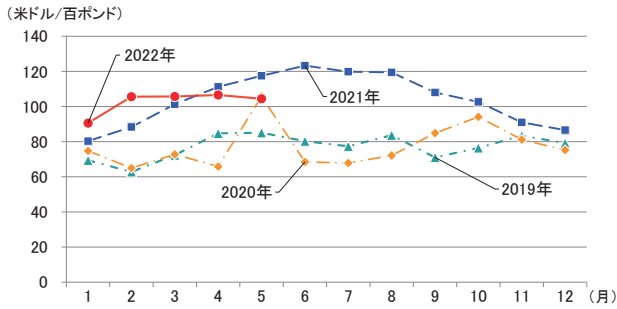
注2：産子数には事故などで死亡した子豚を含まない。

需要の減退から卸売価格は高止まり

USDA農業マーケティング局（AMS）によると、2022年5月の豚肉卸売価格は100ポンド当たり104.43米ドル（1キログラム当たり316.98円：1米ドル＝137.68円^注）、前年同月比11.1%安）となり、4月に続き

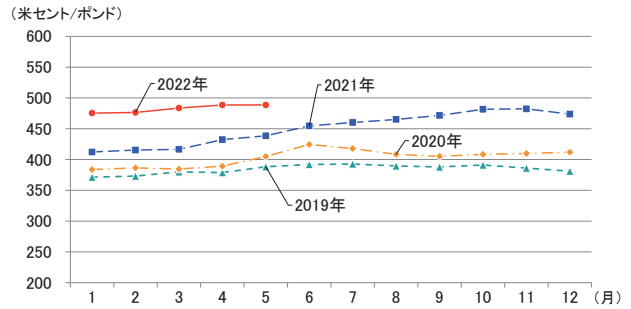
2カ月連続で前年同月を下回った（図1）。例年、卸売価格は夏（6月）に向けて上昇する傾向があるが、今年は2月以降、ほぼ横ばいで推移している。一方、豚肉小売価格については、22年5月は1ポンド当たり488.6米セント（100グラム当たり148.31円、同11.4%高）と、前年同月をかなり大きく上

図1 豚肉卸売価格の推移



資料：USDA「Livestock & Meat Domestic Data」
注：カットアウトバリュー。

図2 豚肉小売価格の推移



資料：USDA「Meat Price Spreads」
注：「Pork（平均）」の価格。

回っている（図2）。USDAは卸売価格が伸びない要因として、小売価格の高騰による需要の減退の可能性を指摘している。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

中国・香港向け輸出が不調の中で、メキシコ向けは好調

USDA経済調査局（ERS）によると、2022年4月の豚肉輸出量は23万9800トン（前年同月比19.3%減）と大幅に減少した（表2）。輸出量減少の主な要因は中国・香港

向けの減少（同69.8%減）にあるが、メキシコ向けは好調を維持し、4月の輸出量は同19.6%増と大幅に増加した。メキシコ向け増加の要因についてUSDAは、米国産鶏肉価格が比較的高値で推移した中で、米国での高病原性鳥インフルエンザ発生による貿易制限から、米国産豚肉に対する需要がより高まったためと分析している。また、輸出量は少ないがドミニカ共和国向けが大幅に増加しており、米国食肉輸出連合会（USMEF）によると、昨年の同国でのアフリカ豚熱発生による豚肉生産量の減少が影響したとしている。

表2 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 (増減率)	シェア	2022年 (1～4月)	
					前年同期比 (増減率)	
メキシコ	69.7	83.4	19.6%	34.8%	356.7	36.3%
日本	47.4	47.7	0.6%	19.9%	173.0	▲12.0%
韓国	23.3	21.2	▲9.2%	8.8%	81.9	▲7.9%
中国・香港	69.4	21.0	▲69.8%	8.7%	79.5	▲71.5%
カナダ	20.8	17.5	▲15.8%	7.3%	74.7	▲14.6%
コロンビア	9.1	12.8	40.9%	5.4%	40.0	▲5.4%
ドミニカ共和国	6.0	11.8	97.8%	4.9%	36.6	26.4%
その他	51.3	24.4	▲52.3%	10.2%	96.1	▲48.4%
合計	297.1	239.8	▲19.3%	100.0%	938.6	▲19.8%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

（調査情報部 上村 照子）

カナダ

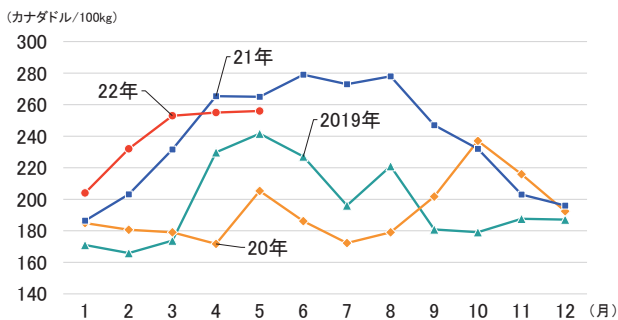
1～4月の豚肉輸出量、米国向けが好調

肥育豚価格は伸び悩むも、引き続き高水準を維持

カナダ農務・農産食品省（AAFC）によると、2022年5月の肥育豚価格は100キログラム当たり256カナダドル（2万7546円：1カナダドル＝107.6円（注）、前年同月比3.4%安）となり、前年同月を2カ月続けて下回った（図1）。例年であれば夏場のバーベキューシーズンに向けて豚肉需要は高まるどころだが、カナダ国内の需要が昨年よりも減速し、肥育豚価格は本年3月以降、ほぼ横ばいで推移している。

（注）三菱UFJサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

図1 肥育豚価格の推移

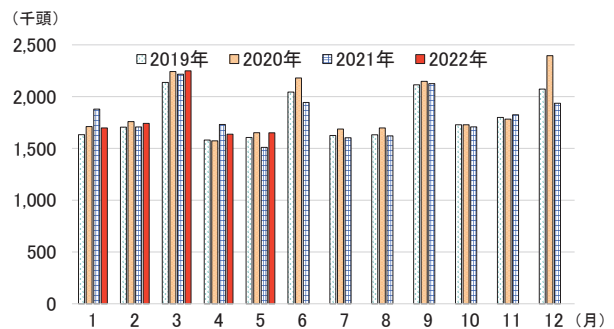


資料：AAFC「Hog Weighted Average Price Report」
注：枝肉重量ベース。

AAFCによると、22年5月の豚と畜頭数は165万1000頭（前年同月比9.3%増）とかなりの程度増加した（図2）。一方で、カナダ西部ではと畜頭数が減少している。現地報道によると、カナダの主要養豚地域である中央マニトバ州の食肉処理場での深刻な労働力不足が要因であるとしている。その結果、

同地域のと畜頭数は、同年1～5月の累計で897万5000頭（前年同期比0.8%減）と前年同期をわずかに下回っている。

図2 豚と畜頭数の推移



資料：AAFC「Hog Slaughtering at Federally and/or Provincially Inspected Packing Plants」

豚肉輸出量、米国向けなどが増加も全体では減少傾向で推移

カナダ統計局（Statistics Canada）によると、2022年4月の豚肉輸出量は9万3100トン（前年同月比11.8%減）とかなり大きく減少し、昨年の5月以降、ほぼ一貫して減少基調にある（表）。

輸出先別に見ると、主要輸出先である中国向けは、9200トン（同71.3%減）と前年同月実績の3分の1以下まで減少している。これは、主に中国国内の豚肉生産の回復によるものとされている。一方、米国向けは、同国内で豚肉価格が高騰している中で、夏場に向けた需要から2万9000トン（同38.1%増）と大幅に増加した。また、日本向けも1万8900トン（同2.2%増）とわずかに増加している。さらに、フィリピン向けも旺盛な国内需要が続いていることで、1万4500トン（同14.2%増）とかなり大きく増加した。現

地報道によると、フィリピンではアフリカ豚熱による国内での豚肉不足への対処として輸入関税の引き下げが本年末まで続くとされて

おり、今後も同国への輸出量は高水準で推移するとみられる。

表 輸出先別豚肉輸出量の推移

(単位：千トン)

	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1~4月)		シェア
					前年同期比 (増減率)	
米国	21.0	29.0	38.1%	118.9	48.4%	30.6%
中国	32.0	9.2	▲71.3%	48.0	▲61.1%	12.3%
日本	18.5	18.9	2.2%	67.8	▲3.3%	17.4%
フィリピン	12.7	14.5	14.2%	50.8	▲0.4%	13.1%
メキシコ	9.6	9.2	▲4.2%	48.3	42.5%	12.4%
韓国	3.3	4.5	36.4%	15.6	18.5%	4.0%
ベトナム	2.6	0.4	▲84.6%	3.0	▲74.2%	0.8%
その他	5.9	7.4	25.4%	36.4	33.2%	9.4%
合計	105.6	93.1	▲11.8%	388.8	▲5.3%	100.0%

資料：Statistics Canada
注1：HSコード0203。
注2：製品重量ベース。

(調査情報部 伊藤 瑞基)

E U

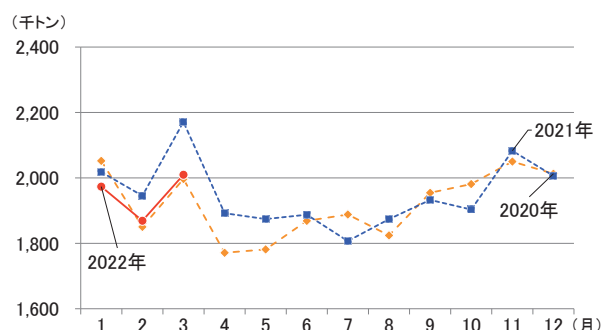
22年3月の豚肉生産量、前年同月比7.4%減

ドイツの豚肉生産量、減少傾向が継続する見込み

欧州委員会によると、2022年3月の豚肉生産量（EU27カ国）は、前年同月比7.4%減の200万9700トンとなった（図、表1）。3月は、1頭当たりの枝肉重量が94.3キログラム（同0.7%減）、と畜頭数が2131万頭（同6.7%減）といずれも前年同月を下回った。

同月の生産量を主要生産国別に見ると、最大の豚肉生産国であるスペインは同0.7%増と22年に入っても好調な生産が続いている。一方で、第2位のドイツ（同12.3%減）を

図 月別豚肉生産量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」
注1：直近月は速報値。
注2：枝肉重量ベース。

はじめ、フランス（同2.0%減）、ポーランド（同19.2%減）、デンマーク（同11.7%減）、オランダ（同4.4%減）、イタリア（同7.8%減）

表1 主要生産国別豚肉生産量の推移

(単位：千トン)

	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～3月)	
				前年同期比 (増減率)	
スペイン	459	463	0.7%	1,414	3.8%
ドイツ	453	397	▲ 12.3%	1,152	▲ 11.8%
フランス	204	200	▲ 2.0%	560	▲ 1.2%
ポーランド	201	163	▲ 19.2%	466	▲ 11.9%
デンマーク	176	156	▲ 11.7%	460	▲ 4.2%
オランダ	162	155	▲ 4.4%	442	▲ 2.2%
イタリア	128	118	▲ 7.8%	324	▲ 7.6%
その他	388	359	▲ 7.4%	1,034	▲ 4.9%
合計	2,171	2,010	▲ 7.4%	5,852	▲ 4.6%

資料：欧州委員会「Eurostat」

注：枝肉重量ベース。

などスペイン以外の主要生産国では、2月に続き軒並み前年同月を下回った。

英国農業・園芸開発委員会（AHDB）によると、20年までEU最大の豚肉生産国であったドイツでは、同国内でのアフリカ豚熱の発生や豚肉部門の収益性の悪化を背景とした繁殖母豚や総飼養頭数の減少により生産量が減少しており、この傾向は少なくとも22年末までは継続すると見込まれている。

EU域外向け輸出量、10カ月連続で前年同月を下回る

欧州委員会によると、2022年3月のEU域外への豚肉（生鮮・冷蔵・冷凍）の輸出量（EU27カ国）は、前年同月比37.0%減の25万3174トンとなった（表2）。豚肉輸出量は21年6月以降、10カ月連続で前年同月を下回って推移している。

輸出先別に見ると、中国向け（同74.8%

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移（EU域外向け）

(単位：千トン)

	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～3月)	
				前年同期比 (増減率)	
中国	238	60	▲ 74.8%	196	▲ 71.8%
日本	21	38	77.6%	99	65.4%
フィリピン	17	25	44.8%	83	90.6%
韓国	20	22	9.1%	53	22.9%
豪州	6	12	98.1%	39	130.9%
米国	6	11	71.8%	30	85.6%
香港	11	4	▲ 62.4%	11	▲ 67.6%
その他	82	81	▲ 0.1%	244	14.5%
合計	402	253	▲ 37.0%	754	▲ 32.8%

資料：欧州委員会「Eurostat」

注：製品重量ベース。

減)、香港向け(同62.4%減)が前年同月を大幅に下回った一方で、日本向け(同77.6%増)、フィリピン向け(同44.8%増)、韓国向け(同9.1%増)、豪州向け(同98.1%増)、米国向け(同71.8%増)は軒並み増加した。

最大の輸出先である中国向けは、同国内の豚肉生産の回復に伴い輸入豚肉の需要が低下しているため、今年に入っても引き続き大幅に減少している。

また、輸出国別に見ると、EU最大の輸出国であるスペイン(同38.6%減)、第2位のデンマーク(同38.1%減)をはじめ、主要輸出国のいずれも減少した(表3)。

AHDBによると、スペインは中国向け輸出量が減少する中で輸出先の多様化を進めており、中国への依存度が下がり、中国以外の輸出先への輸出量が増加しているとしている。特に、EU域外向けでは、韓国、日本、フィリピン向けで顕著な増加が見られた。

表3 輸出国別豚肉輸出量の推移(EU域外向け)

(単位:千トン)

	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1~3月)	
				前年同期比 (増減率)	
スペイン	148	91	▲ 38.6%	286	▲ 35.2%
デンマーク	75	46	▲ 38.1%	149	▲ 25.1%
オランダ	61	39	▲ 35.4%	101	▲ 38.0%
ドイツ	35	22	▲ 37.6%	61	▲ 34.3%
フランス	22	15	▲ 34.9%	40	▲ 38.4%
アイルランド	14	11	▲ 18.6%	32	▲ 13.2%
ポーランド	14	10	▲ 29.9%	29	▲ 24.2%
その他	32	19	▲ 41.8%	55	▲ 34.8%
合計	402	253	▲ 37.0%	754	▲ 32.8%

資料: 欧州委員会「Eurostat」

注: 製品重量ベース。

(調査情報部 小林 智也)

中国

豚肉価格は上昇に転じるもいまだ低水準で推移

繁殖雌豚頭数は前年から縮小傾向

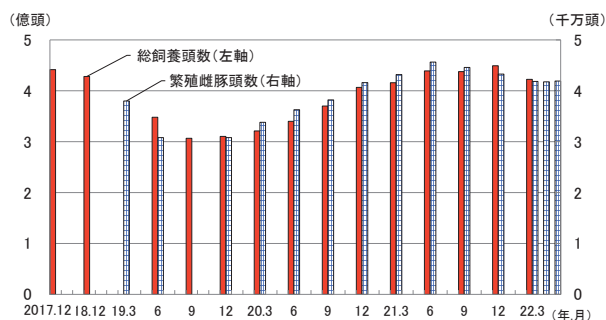
中国農業農村部によると、2022年5月末時点の繁殖雌豚頭数は前年同月比8.1%減、前月比0.4%増の4192万頭となった(図1)。今後の肥育豚飼養頭数を左右する繁殖雌豚頭数は、22年4月以降はわずかに増加しているものの、ピークとなった前年よりも飼養規

模は縮小している。なお、同部が最適な繁殖雌豚頭数としている約4100万頭と比較すると、現在の規模は2.2%上回っている状況にある。

豚と畜頭数は引き続き高水準で推移

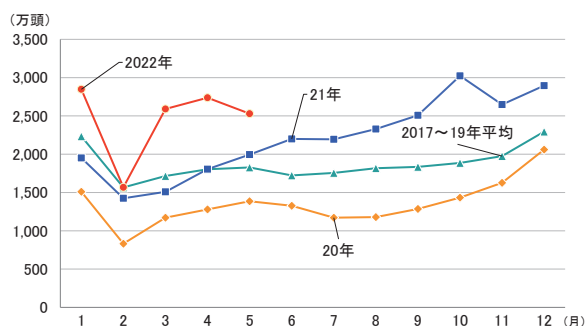
中国農業農村部によると、豚と畜頭数は引き続き前年同月を上回る水準で推移している

図1 豚飼養頭数の推移



資料：中国国家統計局、22年4～5月は中国農業農村部より
注：四半期ごとの公表値。

図2 豚と畜頭数の推移



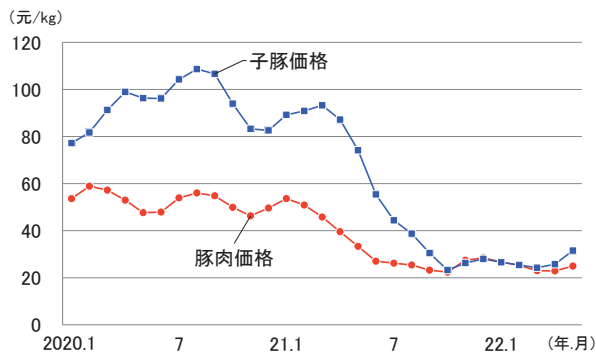
資料：中国農業農村部
注：年間2万頭以上処理すると畜場でのと畜頭数（全体のと畜頭数の約3割）。

（図2）。2022年5月のと畜頭数は2530万頭（前年同月比26.8%増）、1～5月の累計では1万2274万頭（前年同期比41.3%）となり、21年5月以降、おおむねコロナ禍以前の水準（17～19年平均）を上回って推移している。

豚肉や子豚価格は上昇に転じるも、依然として経営は赤字

2022年1月以降、豚肉価格および子豚価格は下落傾向にあったものの、豚肉価格は5月、子豚価格は4月にそれぞれ上昇に転じている。5月の豚肉価格は前月比8.9%高の1キログラム当たり25元（517円：1元＝20.68円^{（注1）}）、子豚価格は同22.4%高の同31.6元（653円）となった（図3）。中国政

図3 豚肉および子豚価格の推移



資料：中国農業農村部

府は、豚肉価格および生体豚価格を下支えるため、3月以降、国家備蓄による豚肉の買い入れを複数回実施しており、最近では6月24日に4万トンの買い入れが実施されている。中国国家発展改革委員会によると、養豚生産者の経営状況の指標の一つである豚/穀物比は少しずつ回復に向かっており^{（注2）}、6月22日には5.78：1と第2級警報および第3級警報水準である5：1台に改善している。なお、5月の生産者の豚1頭当たり損失額は84元（1737円）とされており、前月から153元（3164円）縮小しているものの、依然として赤字経営の状況が続いている。

（注1） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

（注2） 海外情報「豚肉価格低迷で国家備蓄による買入・保管を再度実施（中国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003064.html）および「生体豚価格改善も引き続き豚肉の国家買入を実施（中国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003269.html）を参照されたい。

2022年1～5月の豚肉輸入量は引き続き大幅減

2022年1～5月の豚肉輸入量は、前年同期比64.5%減（67万6309トン）と大幅に減少した（表）。アフリカ豚熱の影響から輸入豚肉の需要が大きかった昨年に比べ、中国国内の豚肉生産が回復したことから豚肉価格

が低迷するなど需給は大きく緩和している。これに加え、COVID-19による検疫の強化や上海など一部都市のロックダウンによる業

務用を中心とした需要の減少、流通への影響もあり、主要輸入先からの豚肉輸入量は総じて前年を下回っている。

表 主要輸入先別豚肉輸入量の推移

(単位：万トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年 (1～5月)	
					前年同期比 (増減率)	
スペイン	22.0	38.2	93.4	109.8	19.5	▲ 69.2%
ブラジル	15.0	22.2	48.1	54.6	13.8	▲ 36.3%
デンマーク	7.2	16.4	36.0	35.2	7.4	▲ 57.2%
米国	8.6	24.5	69.6	39.8	4.8	▲ 78.2%
カナダ	16.0	17.2	41.1	23.6	4.8	▲ 65.5%
オランダ	8.5	16.0	26.5	27.7	4.3	▲ 74.2%
その他	42.0	64.9	115.8	66.8	13.0	▲ 63.6%
合計	119.3	199.4	430.4	357.4	67.6	▲ 64.5%

資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは0203。

(調査情報部 海老沼 一出)

鶏 肉

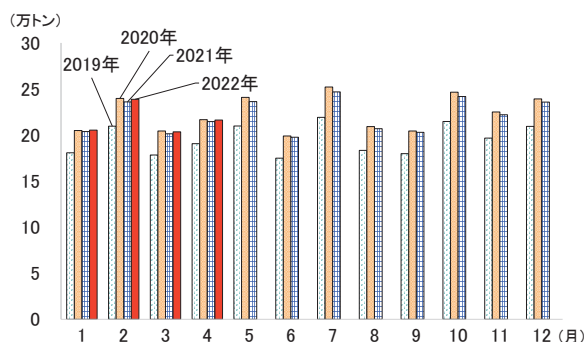
タイ

2022年に入り鶏肉価格は引き続き高値で推移

2022年1～4月の鶏肉生産量は、前年比微増

タイ農業協同組合省農業経済局によると、2022年1～4月の鶏肉生産量は86万3975トン（前年同期比1.0%増）となった（図1）。昨年末のアフリカ豚熱発生の影響^{（注1）}により鶏肉への代替需要が発生し、前年同期をわずかに上回った。しかしながら、飼料価格が高騰する中で大幅な増産は見込めず、今後の生産量はおおむね前年並みで推移すると見込まれている。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：タイ農業協同組合省農業経済局

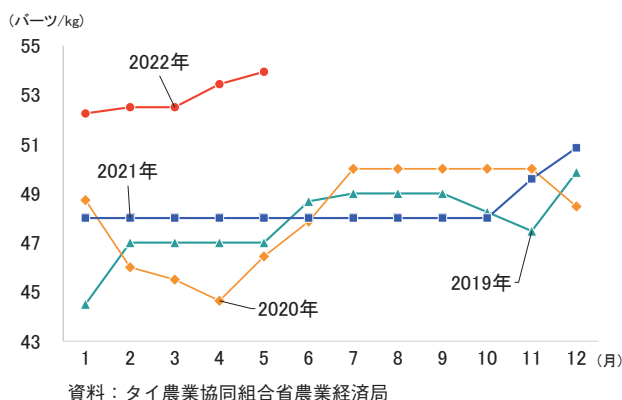
（注1） 海外情報「2022年の豚総出荷頭数、アフリカ豚熱などの影響で減少見込み（タイ）」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003182.html)を参照されたい。

2022年の国内の鶏肉卸売価格は引き続き高値で推移

2022年5月の鶏肉卸売価格は、1キログラム当たり53.9パーツ（212円：1パーツ＝3.93円^{（注2）}）と昨年末からの高騰が継続している（図2）。タイでは、アフリカ豚熱の発生による代替需要の影響とコロナ禍からの経済回復、ウクライナ情勢などを背景としたインフレ圧力などにより、国内外からの鶏肉需要が高まっていることに加え、飼料価格の高騰による生産コストの増加も卸売価格に影響しているとされる。

（注2） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

図2 鶏肉卸売価格の推移



2022年1～4月の冷凍鶏肉輸出量は大幅減

2022年1～4月の冷凍鶏肉の輸出量は、9万9439トン（前年同期比21.4%減）と前年を大幅に下回った（表1）。同年5月以降、タイでは鶏肉処理施設などで外国人労働者の受け入れが進んでいるが、労働者の教育期間が必要なこともあり、依然として労働力不足が続いているとされている。輸出先別に見ると、主要輸出先である日本向けは、前年同期がブラジル産の価格高騰によりタイ産需要の増加となったが、今期はその反動から前年同期を下回った。一方で、マレーシア向けは飼料価格の高騰に起因する同国産鶏肉価格の高騰により、輸入需要が増加している。中国向けは、アフリカ豚熱の影響から回復し、同国産豚肉価格の低迷による代替需要の減少から前年同期を大幅に下回った。

2022年1～4月の鶏肉調製品の輸出量はかなり大きく増加

2022年1～4月の鶏肉調製品輸出量は、21万4934トン（前年同期比12.3%増）と前年をかなり大きく上回った（表2）。輸出

表1 輸出先別冷凍鶏肉輸出量の推移

（単位：万トン）

	2018年	2019年	2020年	2021年	前年比 (増減率)	2022年 (1～4月)	
						前年同期比 (増減率)	
日本	13.7	12.2	12.8	16.7	29.8%	4.2	▲ 27.4%
マレーシア	3.2	4.1	4.1	4.7	14.7%	2.3	60.3%
中国	2.1	7.6	11.5	10.4	▲ 8.9%	1.9	▲ 46.5%
香港	0.5	0.5	0.9	1.0	9.0%	0.4	▲ 9.5%
韓国	0.6	1.1	0.8	1.3	55.5%	0.3	▲ 52.7%
その他	6.4	4.8	3.3	3.2	▲ 0.7%	1.0	▲ 1.6%
合計	26.5	30.3	33.3	37.3	11.8%	9.9	▲ 21.4%

資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは020714。

先別に見ると、日本向けをはじめ多くの仕向け先で増加している。鶏肉生産と同様に調製品も労働力不足が懸念されているものの、コロナ禍からの世界的な経済回復が追い風とな

り、ファストフードなどからの引き合いが強いことや、ウクライナ情勢による一部地域からの代替需要の増加が影響しているとみられる。

表2 輸出先別鶏肉調製品輸出量の推移

(単位：万トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	前年比 (増減率)	2022年 (1～4月)	前年同期比 (増減率)
日本	28.1	29.5	29.2	28.8	▲ 1.2%	10.4	5.4%
英国	15.8	16.5	14.2	13.6	▲ 4.7%	5.7	19.5%
オランダ	3.4	3.6	2.8	3.9	39.0%	1.8	28.7%
韓国	2.5	3.0	2.4	2.1	▲ 11.6%	1.0	25.2%
その他	5.1	6.4	6.1	6.7	9.8%	2.6	13.0%
合計	56.0	59.0	54.6	55.0	0.7%	21.5	12.3%

資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは160232。

(調査情報部 海老沼 一出)

牛乳・乳製品

E U

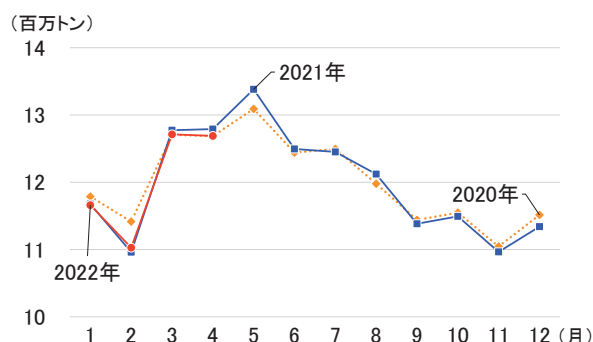
生乳取引価格は上昇傾向で推移

4月の生乳出荷量、前年同月比0.8%減

欧州委員会によると、2022年4月の生乳出荷量（EU27カ国）は、1268万8630トン（前年同月比0.8%減）と前年同月をわずかに下回った（図1、表）。

同月の生乳出荷量を国別に見ると、上位3カ国のドイツ（同2.6%減）、フランス（同2.0%減）、オランダ（同2.6%減）がいずれも下回ったことで、イタリア（同8.1%増）、ポーランド（同1.1%増）などが上回ったものの、これら減少分を補うまでには至らなかった。

図1 生乳出荷量の月別推移



資料：欧州委員会「Eurostat」
注1：直近月は速報値。
注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

例年、生乳出荷量は春先の3～5月にかけて増加するが、4月は前月比0.2%減となった。現地報道によると、高騰する飼料価格が

表 主要生産国別生乳出荷量の推移

(単位：千トン)

	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～4月)	
				前年同期比 (増減率)	
ドイツ	2,758	2,685	▲ 2.6%	10,623	▲ 1.7%
フランス	2,185	2,142	▲ 2.0%	8,310	▲ 1.3%
オランダ	1,183	1,152	▲ 2.6%	4,557	▲ 2.3%
イタリア	1,060	1,145	8.1%	4,388	4.4%
ポーランド	1,070	1,082	1.1%	4,283	2.4%
アイルランド	1,092	1,081	▲ 1.0%	2,480	▲ 0.7%
スペイン	646	632	▲ 2.2%	2,498	▲ 0.4%
デンマーク	473	471	▲ 0.4%	1,872	0.6%
ベルギー	381	381	0.0%	1,493	0.5%
その他	1,944	1,918	▲ 1.3%	7,585	0.2%
合計	12,791	12,689	▲ 0.8%	48,090	▲ 0.2%

資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：速報値。

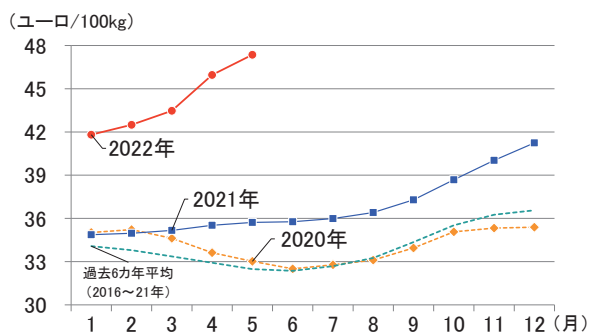
注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

生産者の収益を圧迫していることで、結果として生乳生産の抑制につながったとしている。

生乳出荷量が伸び悩む中、EUの生乳取引価格は右肩上がりで見られ続けている。欧州委員会によると、22年5月の生乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キログラム当たり47.36ユーロ（6828円：1ユーロ＝144.17円^{（注1）}、前年同月比32.6%高）と15カ月連続で前年同月を上回った（図2）。

（注1）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

図2 生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」

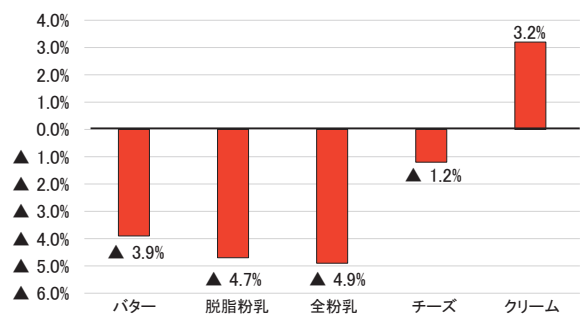
注1：直近月は推定値。

注2：データが未公表のルクセンブルグを除く。

1～4月のクリーム生産量、前年同期比増

欧州委員会によると、2022年1～4月のEUの主要な乳製品の生産量は、クリームが前年同期比3.2%増となった一方で、バター（同3.9%減）、脱脂粉乳（同4.7%減）、全粉乳（同4.9%減）、チーズ（同1.2%減）はいずれも減少した（図3）。現地報道によると、クリーム生産量の増加は、COVID-19に関連する規制解除が進み、外食産業での堅調な

図3 主要な乳製品生産量（2022年1～4月）の対前年増減率



資料：欧州委員会「Milk market observatory」

需要の現れであるとしている。なお、生乳供給量の減少に伴いこれらの乳製品の供給量も減少していることから、乳製品価格は高水準で推移している。

EUの乳製品貿易団体が5月に開催した会議^(注2)では、飼料価格の高騰により乳牛への

飼料給与量が減少し、生乳の乳脂肪分などの低下から乳製品生産量の減少が懸念されていた。

(注2) 本誌97ページ「EU酪農・乳業の現状と展望～欧州乳製品輸出入・販売業者連合（EUCOLAIT）総会より～」を参照されたい。

(調査情報部 小林 智也)

豪州

乳価は好調も、生乳生産量は低迷

生乳生産量は引き続き低調

デーリー・オーストラリア（DA）によると、2022年4月の生乳生産量は全州で減少したことにより、58万3294キロリットル（60万793トン相当、前年同月比6.6%減）とかなりの程度減少した（図1）。この結果、2021/22年度（7月～翌6月）4月までの累計も、730万1829キロリットル（752万884トン相当、前年同期比3.4%減）とやや減少した。豪州の生乳生産量は、飼養頭数の減少などから、21年6月以降、前年同月を下回って推移している。

このような状況を受けてDAは22年5月、今年度の生乳生産量見込みを22年3月時点見込みからさらに引き下げ^(注1)、前年度比

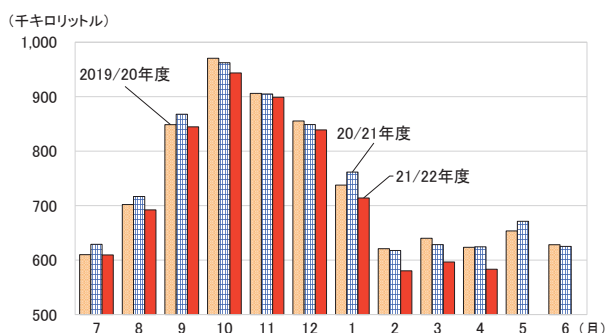
3.5%減の857万キロリットル（883万トン相当）とした。なお、22/23年度の生乳生産量については、好ましい気象条件や高い乳価などのプラス要因はあるものの、労働力不足や堅調な牛肉価格などが酪農家の離農や乳牛飼養頭数の減少につながるなどから、855万キロリットル（881万トン相当、同0.2%減）と「安定的に」推移すると予測している。

(注1) DAの2021/22年度生乳生産量見込みは、年度開始直前の21年6月時点では前年度比0～2%増と見込んでいたが、22年3月には同1～3%減の859万～877万リットル（885万～903万トン相当）と下方修正していた。

22/23年度乳価、歴史的な高値でスタート

2022年6月1日に公表された22/23年度の当初乳価^(注2)は、主要乳業各社ともに前年度の当初乳価をおおよそ1～2割上回る高値となった^(注3)。その後も一定の乳量を確保したい各社の思惑から値上げ競争が行われ、新年度開始日となる7月1日時点では、豪州乳業最大手のサポート・デーリーオーストラリア社の生乳の固形分^(注4)1キログラム当たり9.40豪ドル（901円：1豪ドル＝95.90円^(注5)）など、いずれも歴史的な高値を提示している。

図1 生乳生産量の推移



資料：DA

注：年度は7月～翌6月。

(注2) 年度当初に乳業各社などが設定する生産者支払乳価の最低価格。「酪農業界における行動規範(Dairy code of conduct)」に基づき、毎年6月1日までの公表が義務付けられている。

(注3) 詳細は、海外情報「2022/23年度の当初乳価は記録的な高値(豪州)」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003273.html)を参照されたい。

(注4) 乳脂肪分および乳たんぱく質。

(注5) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

主要乳製品4品目、中国向け輸出はいずれも振るわず

DAが発表した2022年4月の主要乳製品4品目の輸出量は、脱脂粉乳および全粉乳については、最大の輸出先である中国向け輸出が減少したものの、クウェートや、タイ、インドネシアなどのアジア向け輸出の伸びなど

を受け、いずれも増加した(表、図2)。バターおよびバターオイルは、主要輸出先である中国や韓国向け輸出の不振を受け、大幅に減少した。また、チーズは、最大の輸出先である日本や中国向け輸出の減少を受け、大幅に減少した。

中国は、豪州にとって主要乳製品輸出先の一つであるが、中国国内での生乳生産量の増加やCOVID-19に起因する需要低下、乳製品国際価格の高騰などにより、乳製品輸入量が減少傾向にあるという(注6)。

(注6) 『畜産の情報』2022年7月号「生乳生産量は増加、乳製品輸入量は大幅減」(https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002270.html)を参照されたい。

表 乳製品輸出量の推移

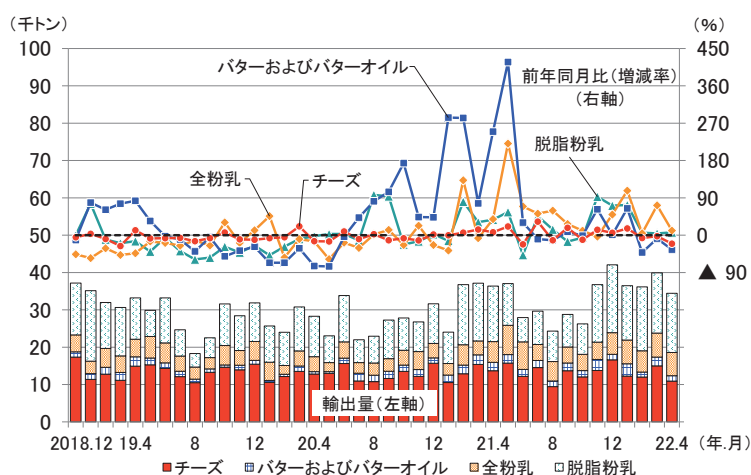
(単位：トン)

品目	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 (増減率)	2021/22年度 (7月～翌4月)	
				2021/22年度 (7月～翌4月)	前年同期比 (増減率)
脱脂粉乳	14,871	15,882	6.8%	131,162	24.1%
全粉乳	5,578	6,197	11.1%	53,358	33.5%
バターおよびバターオイル	2,236	1,462	▲ 34.6%	19,985	1.2%
チーズ	13,703	10,913	▲ 20.4%	130,298	2.3%

資料：DA

注：製品重量ベース。

図2 乳製品輸出量および前年同月比(増減率)の推移



資料：DA

注：製品重量ベース。

(調査情報部 阿南 小有里)

2021/22年度の生乳生産量、前年度よりやや減少

5月の生乳生産量、10カ月連続で前年同月を下回る

ニュージーランド乳業協会（DCANZ）によると、2022年5月の生乳生産量は91万700トン（前年同月比6.5%減）と10カ月連続で前年同月を下回った（図1）。また、2021/22年度（6月～翌5月）の累計でも2139万3300トン（前年度比4.2%減）と減少した。

ニュージーランド証券取引所（NZX）はこの要因について、春の冷涼多雨による日照不足と夏の酷暑による乾燥が継続したことで、放牧環境が不良となったことを挙げてい

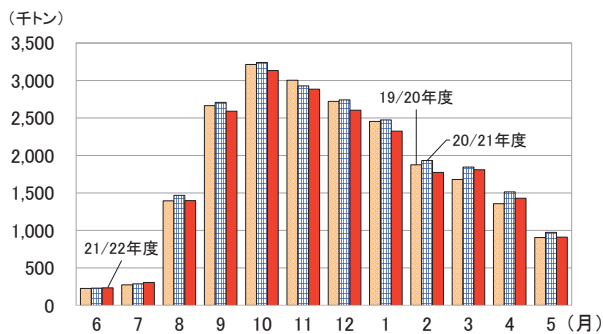
る。また、気候要因に加え、飼料などの世界的な価格上昇が生乳生産量の減少に拍車をかけたとしている。

乳製品輸出量、主要3品目が前年同月を大幅に下回る

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2022年5月の乳製品輸出量は、バターおよびバターオイルを除く主要3品目でいずれも前年同月を下回った（表1、図2）。

品目別に見ると、脱脂粉乳は、最大の輸出先である中国向けが前年同月比で5割程度減少したことを受けて、全体でも大幅に減少した。全粉乳は、日本向けが大幅に増加したものの、最大の輸出先である中国向けをはじめ、マレーシア向けなどが大幅に落ち込んだことで、全体でも大幅に減少した。バターおよびバターオイルは、最大輸出先の中国向けがやや減少したものの、日本や米国向けを中心に全体で増加した。チーズは、主要輸出先である豪州向けが大幅に増加したものの、最大の輸出先である中国向けが大幅に減少したため、全体でも大幅に減少した。

図1 生乳生産量の推移



資料：DCANZ
注：年度は6月～翌5月。

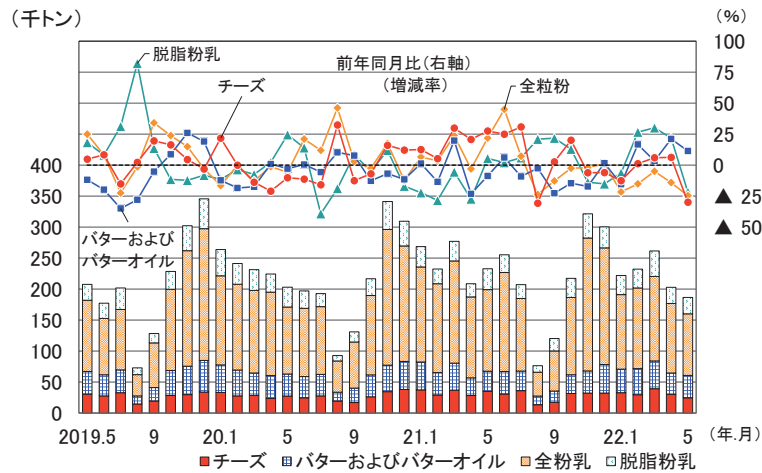
表1 乳製品輸出量の推移

(単位：トン)

品目	2021年 5月	2022年 5月	前年同月比 (増減率)	2021/22年度 (7月～翌5月)	
				2021/22年度 (7月～翌5月)	前年同期比 (増減率)
脱脂粉乳	33,648	26,352	▲ 21.7 %	310,780	3.0 %
全粉乳	131,759	99,352	▲ 24.6 %	1,346,395	▲ 9.7 %
バターおよびバターオイル	32,498	36,238	11.5 %	371,260	▲ 2.7 %
チーズ	35,009	24,570	▲ 29.8 %	319,786	▲ 3.1 %

資料：Stats NZ
注1：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405.90、チーズが0406。
注2：製品重量ベース。
注3：年度は7月～翌6月。

図2 乳製品輸出货量および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ
注：製品重量ベース。

GDT価格は、チーズが2021年10月以来の4000ドル台に下落

2022年6月21日に開催されたGDT^(注1)の主要乳製品4品目の1トン当たりの平均取引価格は、表2、図3の通りとなった。

品目別に見ると、脱脂粉乳は北アジア^(注2)や東南アジアからの需要を背景に堅調に推移した。全粉乳は中南米からの引き合いが強かったものの、北アジアからの引き合いが弱く、わずかに下落した。バターは東南アジアからの需要が落ち着いたものの、北アジアからの需要に牽引され前回よりもわずかに上昇した。一方、チーズは、北アジアからの引き合いが強かったものの、前回よりもかなりの程度下落した。NZXはこの理由について、市場の余剰チーズが原因でオークション開始当

初から劇的に需要が不足していたためと推測している。また、今回の結果が供給過剰によるものなのか、引き続き市場全体の動向を注視する必要があるとしている。

(注1) グローバルデイリートレード。月2回開催される電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。
(注2) ニュージーランド外務貿易省は、中国、日本、香港、韓国、台湾を北アジアとしている。

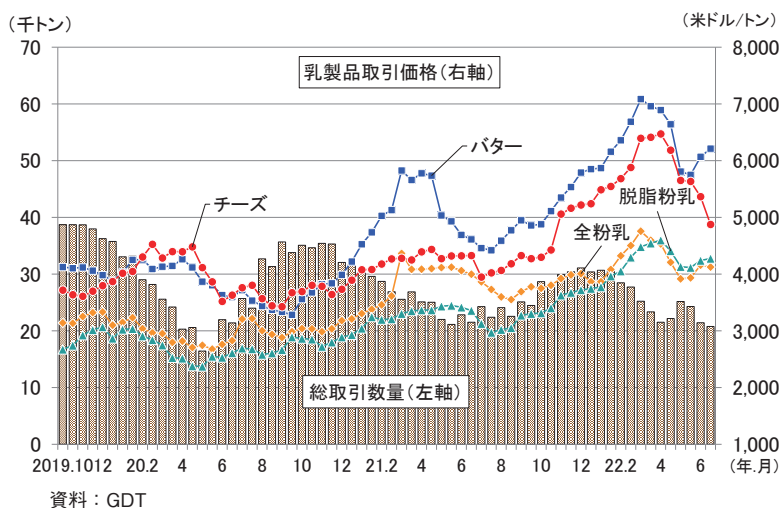
表2 GDT乳製品取引価格(2022年6月21日開催)
(単位：米ドル/トン、万円/トン)

品目	価格		前年比 (騰落率)	前回比 (騰落率)
	米ドル	万円		
脱脂粉乳	4,276	59.0	27.4 %	0.8 %
全粉乳	4,125	56.9	3.2 %	▲ 0.8 %
バター	6,213	85.7	34.7 %	2.4 %
チーズ	4,875	67.3	12.6 %	▲ 9.1 %

注1：1米ドル=137.68円（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場）として計算。

注2：前回は6月7日に開催。

図3 GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



(調査情報部 工藤 理帆)

飼料穀物

世界

2022/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年6月10日、2022/23年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は11億8581万トン（前年度比2.5%減）と前月から509万トン上方修正されたものの、過去最高となった前年度をわずかに下回ると見込まれている。国別に見ると、ウクライナの生産量が政府の発表を踏まえて前月から550万トン上方修正され、これが反映される形となった。その他の主要国の生産量はいずれも前月から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億8267万トン（同7.1%減）と前月から3万トン下方修正され、

前年度からかなりの程度減少が見込まれている。

輸入量は、世界全体で1億7668万トン（同1.5%減）と前月から16万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。国別に見ると、EUは小麦価格高騰などの影響により前月から100万トン上方修正された一方で、モロッコ、ヨルダンおよびペルーなどが下方修正されたことで、これを吸収する形となった。

消費量は、世界全体で11億8628万トン（同1.0%減）と前月から131万トン上方修正されたが、前年度からわずかな減少が見込まれている。国別に見ると、ウクライナが150万トン、EUが100万トンそれぞれ上方修正された。最大の消費国である中国は2億

9500万トンと前月から据え置かれた。

532万トン上方修正され、前年度並みの水準が見込まれている。

この結果、期末在庫は事前予想を上回る

3億1045万トン（同0.2%減）と前月から

表 主要国のトウモロコシの需給見通し（2022年6月10日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度		前年度比 (増減率)
		(推計値)	(5月予測)	(6月予測)	
米国					
期首在庫	48.76	31.36	36.57	37.71	20.2%
生産量	358.45	383.94	367.30	367.30	▲ 4.3%
輸入量	0.62	0.64	0.64	0.64	0.0%
消費量	306.54	315.99	309.01	309.13	▲ 2.2%
輸出量	69.92	62.23	60.96	60.96	▲ 2.0%
期末在庫	31.36	37.71	34.54	35.55	▲ 5.7%
アルゼンチン					
期首在庫	3.62	1.18	1.49	1.49	26.3%
生産量	52.00	53.00	55.00	55.00	3.8%
輸入量	0.01	0.01	0.01	0.01	0.0%
消費量	13.50	13.70	14.00	14.00	2.2%
輸出量	40.94	39.00	41.00	41.00	5.1%
期末在庫	1.18	1.49	1.49	1.49	0.0%
ブラジル					
期首在庫	5.33	4.15	4.65	4.65	12.0%
生産量	87.00	116.00	126.00	126.00	8.6%
輸入量	2.85	2.00	1.30	1.30	▲ 35.0%
消費量	70.00	73.00	77.00	77.00	5.5%
輸出量	21.02	44.50	47.00	47.00	5.6%
期末在庫	4.15	4.65	7.95	7.95	71.0%
ウクライナ					
期首在庫	1.48	0.83	6.77	6.77	8.2倍
生産量	30.30	42.13	19.50	25.00	▲ 40.7%
輸入量	0.02	0.02	0.00	0.00	-
消費量	7.10	13.20	9.20	10.70	▲ 18.9%
輸出量	23.86	23.00	9.00	9.00	▲ 60.9%
期末在庫	0.83	6.77	8.07	12.07	78.3%
中国					
期首在庫	200.53	205.70	210.24	210.24	2.2%
生産量	260.67	272.55	271.00	271.00	▲ 0.6%
輸入量	29.51	23.00	18.00	18.00	▲ 21.7%
消費量	285.00	291.00	295.00	295.00	1.4%
輸出量	0.00	0.02	0.02	0.02	0.0%
期末在庫	205.70	210.24	204.22	204.22	▲ 2.9%
世界計					
期首在庫	307.47	293.25	309.39	310.92	6.0%
生産量	1,129.00	1,216.07	1,180.72	1,185.81	▲ 2.5%
輸入量	185.34	179.45	176.84	176.68	▲ 1.5%
消費量	1,143.22	1,198.39	1,184.97	1,186.28	▲ 1.0%
輸出量	182.87	196.73	182.70	182.67	▲ 7.1%
期末在庫	293.25	310.92	305.13	310.45	▲ 0.2%

資料：USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注：各国の穀物年度 世界、米国：9月～翌8月/中国、ウクライナ：10月～翌9月/ アルゼンチン、ブラジル：3月～翌2月。

（調査情報部 針ヶ谷 敦子）

南米での生産回復などから 大豆の期末在庫は大幅増、1億トン台に回復

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年6月10日、2022/23年度の世界の大豆需給予測値を更

新した（表）。

これによると、世界の生産量は3億9537万トン（前年度比12.3%増）と前月から68万トン上方修正された。うち、最大の生産国

表 主要国の大豆需給見通し（2022年6月10日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度		前年度比 (増減率)	
		(推計値)	(5月予測)	(6月予測)		
米国	期首在庫	14.28	6.99	6.39	5.58	▲ 20.2%
	生産量	114.75	120.71	126.28	126.28	4.6%
	輸入量	0.54	0.41	0.41	0.41	0.0%
	消費量	58.26	60.28	61.37	61.37	1.8%
	輸出量	61.52	59.06	59.87	59.87	1.4%
	期末在庫	6.99	5.58	8.43	7.61	36.4%
ブラジル	期首在庫	20.42	29.40	21.36	21.86	▲ 25.6%
	生産量	139.50	126.00	149.00	149.00	18.3%
	輸入量	1.02	0.45	0.75	0.75	66.7%
	消費量	46.68	48.50	48.75	49.00	1.0%
	輸出量	81.65	82.25	88.50	88.50	7.6%
	期末在庫	29.40	21.86	30.51	30.76	40.7%
アルゼンチン	期首在庫	26.65	25.06	19.30	20.65	▲ 17.6%
	生産量	46.20	43.40	51.00	51.00	17.5%
	輸入量	4.82	2.40	4.80	4.80	100.0%
	消費量	40.16	40.25	41.00	41.00	1.9%
	輸出量	5.20	2.75	4.70	4.70	70.9%
	期末在庫	25.06	20.65	22.10	23.50	13.8%
中国	期首在庫	24.61	31.16	30.75	30.74	▲ 1.3%
	生産量	19.60	16.40	17.50	17.50	6.7%
	輸入量	99.76	92.00	99.00	99.00	7.6%
	消費量	93.00	89.00	95.00	95.00	6.7%
	輸出量	0.07	0.10	0.10	0.10	0.0%
	期末在庫	31.16	30.74	31.56	31.56	2.7%
世界計	期首在庫	94.65	99.89	85.24	86.15	▲ 13.8%
	生産量	368.13	351.99	394.69	395.37	12.3%
	輸入量	165.47	154.81	167.12	167.12	8.0%
	消費量	315.09	315.37	326.76	327.18	3.7%
	輸出量	164.51	155.90	170.01	170.31	9.2%
	期末在庫	99.89	86.15	99.60	100.46	16.6%

資料：USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注1：各国の穀物年度 米国：9月～翌8月／ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌9月。

注2：消費量は搾油仕向量である。

であるブラジル、これに続く米国はともに前月から据え置かれた。なお、前月予測から増加率が縮小したのは、前年度のブラジルの生産量が100万トン上方修正されたことによる。

輸出量は、世界全体で1億7031万トン（同9.2%増）と前月から30万トン上方修正された。うち、最大の大豆輸出国であるブラジル、これに続く米国はともに前月から据え置かれた。

輸入量は、世界全体で1億6712万トン（同8.0%増）と前月から据え置かれた。うち、最大の輸入国である中国は9900万トン（同7.6%増）と同じく据え置かれた。

消費量（搾油仕向け）は、世界全体で3億2718万トン（同3.7%減）と前月から42万トン上方修正された。うち、最大の消費国である中国は9500万トンと前月から据え置かれた。

この結果、期末在庫は1億46万トン（同16.6%増）と前月から86万トン上方修正された。前年度の期末在庫は、南米での減産などから15/16年度以来となる8000万トン台に減少したが、22/23年度は増産予測を受けて18/19年度以来となる1億トン台が見込まれている。

（調査情報部 横田 徹）

米 国

2022/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は9%台の見込み

USDA/WAOBは2022年6月10日、2022/23年度（9月～翌8月）の米国のトウモロコシ需給見通しを更新した（表）。

生産量は、144億6000万ブッシェル（3億6730万トン^{（注1）}、前年度比4.3%減）と前月から据え置かれ、前年度からやや減少すると見込まれている。

消費量は、121億7000万ブッシェル（3億913万トン、同2.2%減）と前月から500万ブッシェル（13万トン）上方修正されたが、前年度からわずかな減少が見込まれている。用途別では、食品、種子、その他工業向けがいずれも上方修正された。一方で、異性化糖向けは、グルコース、デキストロースおよびでん粉用向けの増加の影響を受けて減少が見込まれている。

輸出量は、24億ブッシェル（6096万トン、同2.0%減）と前月から据え置かれ、前年度からわずかに減少すると見込まれている。

この結果、期末在庫は、21/22年度の輸出量の下方修正を受けた22/23年度の期首在庫の上方修正により、14億ブッシェル（3555万トン、同5.7%減）と前月から4000万ブッシェル（102万トン）上方修正されたが、前年度をやや下回ると見込まれている。

また期末在庫率（総消費量に対する期末在庫量）は9.6%（同0.4ポイント減）と、依然として10%を割り込んでいる。

生産者平均販売価格は、同13.4%高の1ブッシェル当たり6.75米ドル（929円。1キログラム当たり36.6円：1米ドル＝137.68円^{（注2）}）と前月から据え置かれたが、前年度からかなり大きく上昇し、12/13年度に記録した同6.89米ドル以来の高値が予測されている。

（注1） 1ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。

（注2） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

表 米国のトウモロコシの需給見通し（2022年6月10日米国農務省公表）

区分	-単位-	2020/21年度	2021/22年度 (推計値)	2022/23年度			前年度比 (増減率)
				(5月予測)	(6月予測)	参考(換算値)	
作付面積	(百万エーカー)	90.7	93.4	89.5	89.5	36.2 (百万ヘクタール)	▲4.2%
収穫面積	(百万エーカー)	82.3	85.4	81.7	81.7	33.1 (百万ヘクタール)	▲4.3%
単収	(ブッシェル/エーカー)	171.4	177.0	177.0	177.0	11.1 (トン/ヘクタール)	0.0%
生産量	(百万ブッシェル)	14,111	15,115	14,460	14,460	367.30 (百万トン)	▲4.3%
輸入量	(百万ブッシェル)	24	25	25	25	0.64 (百万トン)	0.0%
期首在庫	(百万ブッシェル)	1,919	1,235	1,440	1,485	37.71 (百万トン)	20.2%
総供給量	(百万ブッシェル)	16,055	16,375	15,925	15,970	405.65 (百万トン)	▲2.5%
国内消費量	(百万ブッシェル)	12,068	12,440	12,165	12,170	309.13 (百万トン)	▲2.2%
飼料など向け	(百万ブッシェル)	5,597	5,625	5,350	5,350	135.90 (百万トン)	▲4.9%
食品・種子・その他工業向け	(百万ブッシェル)	6,471	6,815	6,815	6,820	173.23 (百万トン)	0.1%
うちエタノール向け	(百万ブッシェル)	5,033	5,375	5,375	5,375	136.53 (百万トン)	0.0%
輸出量	(百万ブッシェル)	2,753	2,450	2,400	2,400	60.96 (百万トン)	▲2.0%
総消費量	(百万ブッシェル)	14,821	14,890	14,565	14,570	370.09 (百万トン)	▲2.1%
期末在庫	(百万ブッシェル)	1,235	1,485	1,360	1,400	35.55 (百万トン)	▲5.7%
期末在庫率	(%)	8.3	10.0	9.3	9.6		0.4ポイント減
生産者平均販売価格	(米ドル/ブッシェル)	4.53	5.95	6.75	6.75	36.6 (円/kg)	13.4%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：年度は各年9月～翌8月。

注2：1エーカーは約0.4047ヘクタール。

(調査情報部 針ヶ谷 敦子)

ブラジル

2021/22年度トウモロコシ生産量、前年度比3割増の見込み

ブラジル国家食糧供給公社（CONAB）は6月8日、2021/22年度第9回目となる主要穀物の生産状況等調査結果を公表した(表、図1、2)。この調査は、春植えの夏期作物(大

豆、第1期作トウモロコシなど)や秋植えの冬期作物(第2期作・第3期作トウモロコシ、小麦、大麦、ライ麦など)の生産予測を毎月公表するものである。

表 2021/22年度の主要穀物等の生産予測

	作付面積 (千ha)				単収 (トン/ha)				生産量 (千トン)			
	2020/21	2021/22			2020/21	2021/22			2020/21	2021/22		
		(5月予測)	(6月予測)	前年度比増減率		(5月予測)	(6月予測)	前年度比増減率		(5月予測)	(6月予測)	前年度比増減率
穀物合計	69,777.9	73,401.3	73,743.1	5.7%	3.7	3.7	3.7	0.5%	255,507	270,164.4	271,283.8	6.2%
トウモロコシ	19,943.6	21,498.8	21,661.2	8.6%	4.4	5.3	5.3	21.8%	87,096.8	114,588.1	115,223.1	32.3%
第1期作	4,348.4	4,564.1	4,534.7	4.3%	5.7	5.4	5.5	▲3.8%	24,726.5	24,675.8	24,810.3	0.3%
第2期作	14,999.6	16,286.7	16,456.5	9.7%	4.0	5.4	5.3	32.1%	60,741.6	87,692.6	88,015.8	44.9%
第3期作	595.6	648.0	670.0	12.5%	2.7	3.4	3.6	30.8%	1,628.5	2,219.6	2,396.9	47.2%
大豆	39,195.6	40,921.9	40,988.5	4.6%	3.5	3.0	3.0	▲14.0%	138,153.0	123,829.5	124,268.0	▲10.1%

資料：ブラジル国家食糧供給公社（CONAB）

注1：2022年6月8日公表データ。

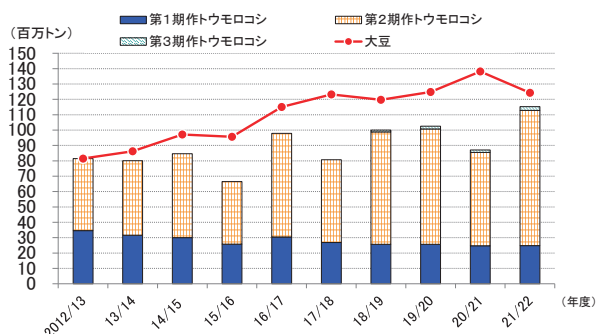
注2：第1作トウモロコシは、例年、9月ごろから南部より順次播種され、翌5月ごろまでに収穫をほぼ終える。

注3：第2作トウモロコシは、主に中西部と南部パラナ州で1～3月にかけて播種が行われ、6～9月に収穫される。

注4：第3作トウモロコシは、主に北部と北東部で5～6月にかけて播種が行われ、10～11月ごろに収穫される。

注5：大豆は、10月ごろから順次播種され、翌5月ごろまでに収穫をほぼ終える。

図1 トウモロコシと大豆の生産量の推移

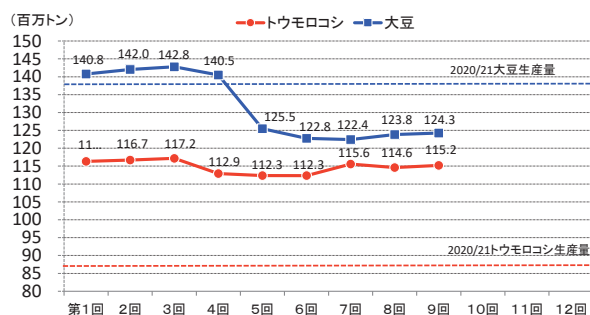


資料：CONAB

注1：2021/22年度は予測値。

注2：2022年6月8日公表データ。

図2 2021/22年度の生産予測値の推移



資料：CONAB

注：生産予測値の第1回目は10月公表、以降毎月更新。

第2期作トウモロコシ、中西部の一部などで収穫作業が開始

2021/22年度（第1～第3期作）のトウモロコシ生産量は、前回より63万5000トン上方修正され、1億1522万3100トン（前年度比32.3%増）と前年度を大幅に上回ると見込まれている。これは、CONABが統計を取り始めて以来、最大となった19/20年度の記録を更新するものとなる。

全生産量の4分の1弱を占める第1期作トウモロコシは、作付面積の85%（22年5月末時点）で収穫が行われ、生産量は前年度並みの2481万300トン（同0.3%増）と見込まれている。これは、作付面積が前年度より4.3%増加したものの、主産地である南部のリオグランデス州やパラナ州で、21年11～12月にかけて深刻な水不足となり単収が大幅に減少したためである。

全体の4分の3強を占める第2期作は、中西部のマットグロッソ州、ゴイアス州、北部のトカンチンス州で収穫が始まった。21/22年度の実績は、作付面積が前年度比9.7%増と過去最大であるとともに単収が大幅に改善することから、8801万5800トン（同44.9%増）と前年度を大幅に上回る

と見込まれている。21/22年度の播種作業は、ほとんどの地域で理想的な期間内に行われたものの、中部の一部地域では4月前後に降水量が急減し、作物の成長が阻害された。また、5月には中部の一部地域で降霜が発生したが、その影響は軽微であった。さらに、南部のパラナ州や中西部のマットグロッソ州の一部地域では、害虫（ヨコバイ）の影響が懸念されている。

全生産量の2%程度を占める第3期作については、播種が行われており、堅調な市場価格を背景として作付面積が前年より12.5%増加すると見込まれている。

大豆の収穫作業は終了し、生産量は前年度比10.1%減の見込み

2021/22年度の実績は、作付面積の99.1%（22年5月末時点）で行われ実質的に終了した。大豆生産量は、前回より43万8500トン上方修正されたものの、1億2426万8000トン（前年度比10.1%減）と前年度をかなりの程度下回ると見込まれている。これは、南部各州および中西部のマットグロッソ州において、21年11～12月にかけて深刻な水不足となり、単収が大幅に減少したためである。

大豆需給動向を見ると、21/22年度の加工量が前回より89万4000トン上方修正され4774万7000トン（同0.7%増）と見込まれている。これは、大豆油や大豆かすの国際価格が高く搾油業者が利益を確保できる状

況にあるため、輸出向けを中心に加工量が増加した。また、大豆輸出量は、国内での加工量の増加などを反映して前回より176万8000トン下方修正され、7523万2000トン（同12.6%減）と見込まれている。

参考1 ブラジルのトウモロコシ需給動向

（単位：千トン）

年度	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	増減率 (%)
期首在庫量	14,582.1	10,189.4	10,673.8	7,781.8	▲ 27.1
生産量	100,042.7	102,586.4	87,096.8	115,223.1	32.3
輸入量	1,596.4	1,453.4	3,090.7	1,700.0	▲ 45.0
供給量	116,221.2	114,229.2	100,861.4	124,704.9	23.6
消費量	64,957.8	68,662.5	72,263.8	77,122.0	6.7
輸出量	41,074.0	34,892.9	20,815.7	37,000.0	77.8
期末在庫量	10,189.4	10,673.8	7,781.8	10,582.9	36.0

資料：CONAB

注：2022年6月8日公表データ。

参考2 ブラジルの大豆需給動向

（単位：千トン）

年度	2020/21	2021/22	増減率 (%)
期首在庫量	4,221	6,171	46.2
生産量	138,153	124,268	▲ 10.1
輸入量	864	900	4.2
種子/その他	3,522	3,496	▲ 0.7
輸出量	86,110	75,232	▲ 12.6
加工量	47,434	47,747	0.7
期末在庫量	6,171	4,864	▲ 21.2

資料：CONAB

注：2022年6月8日公表データ。

（調査情報部 井田 俊二）

中国

トウモロコシ、生産量は前年度並みも2億7000万トン台を維持

中国農業農村部は6月10日、最新の「中国の農産物需給状況分析」を公表した。このうち、2022/23年度（10月～翌9月）のトウモロコシの需給見通しは次の通りである（表1）。

作付面積、収穫面積はいずれも4252万

4000ヘクタール（前年度比1.8%減）と5月予測から据え置かれた。また、生産量は、単収の増加が見込まれるものの、作付面積の減少などから2億7256万トン（前年度比同）と同じく据え置かれた。ただし、初の2億7000万トン台に到達した前年度並みの水準

は維持するとされている。

輸入量は、1800万トン（同10.0%減）と同じく据え置かれ、記録的な輸入量となった20/21年度から減少傾向にある。

消費量は、2億9051万トン（同1.0%増）とわずかな増加が見込まれているが、引き続き、消費の6割強を占める飼料向けが消費をけん引している。

この結果、22/23年度のトウモロコシの

過不足は4万トン（同99.2%減）のプラスとなるが、前年度からは大幅な減少が見込まれている。

なお、同年度の国内のトウモロコシ生産地平均卸売価格は、1トン当たり2400~2600円（4万9632円~5万3768円：1元=20.68円^(注)）と引き続き高い水準での推移が見込まれている。

表1 中国のトウモロコシ需給見通し（2022年6月10日中国農業農村部公表）

区 分	—単位—	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度		前年度比 (増減率)
			(推計値)	(5月予測)	(6月予測)	
作付面積	(千ヘクタール)	41,264	43,324	42,524	42,524	▲ 1.8%
収穫面積	(千ヘクタール)	41,264	43,324	42,524	42,524	▲ 1.8%
単収	(キログラム/ヘクタール)	6,317	6,291	6,410	6,410	1.9%
生産量	(万トン)	26,066	27,255	27,256	27,256	0.0%
輸入量	(万トン)	2,956	2,000	1,800	1,800	▲ 10.0%
総供給量（生産量+輸入量）	(万トン)	29,022	29,255	29,056	29,056	▲ 0.7%
消費量	(万トン)	28,216	28,770	29,051	29,051	1.0%
食用向け	(万トン)	955	965	980	980	1.6%
飼料向け	(万トン)	18,000	18,600	18,800	18,800	1.1%
工業向け	(万トン)	8,000	8,000	8,100	8,100	1.3%
種子向け	(万トン)	187	195	191	191	▲ 2.1%
その他向け	(万トン)	1,074	1,010	980	980	▲ 3.0%
輸出量	(万トン)	0	2	1	1	—
総消費量（消費量+輸出量）	(万トン)	28,216	28,772	29,052	29,052	1.0%
差引数量（総供給量-総消費量）	(万トン)	806	483	4	4	▲ 99.2%

資料：中国農業農村部
注：年度は10月~翌9月。

大豆、生産量は大幅増も輸入量は9500万トン台を維持

2022/23年度の大豆の需給見通しは次の通りである（表2）。

作付面積、収穫面積はいずれも993万3000ヘクタール（前年度比18.3%増）と5月予測から据え置かれたが、引き続き大幅増が見込まれている。また、生産量は、作付面積の増加などに加えて単収も増加することで

1948万トン（同18.8%増）と見込まれている。

輸入量は、9520万トン（同2.4%増）と同じく据え置かれたが、記録的な輸入量となった20/21年度の水準は下回るとされている。

消費量は、1億1287万トン（同3.2%増）と同じく据え置かれたが、わずかな増加が見込まれ、引き続き消費の8割強を占める搾油向け需要が消費をけん引するとみられている。

この結果、22/23年度の大豆の過不足は166万トン（同8400%増）のプラスとなり、

表2 中国の大豆需給見通し（2022年6月10日中国農業農村部公表）

区 分	—単位—	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度		前年度比 (増減率)
			(推計値)	(5月予測)	(6月予測)	
作付面積	(千ヘクタール)	9,882	8,400	9,933	9,933	18.3%
収穫面積	(千ヘクタール)	9,882	8,400	9,933	9,933	18.3%
単収	(キログラム/ヘクタール)	1,983	1,952	1,961	1,961	0.5%
生産量	(万トン)	1,960	1,640	1,948	1,948	18.8%
輸入量	(万トン)	9,978	9,300	9,520	9,520	2.4%
総供給量（生産量+輸入量）	(万トン)	11,938	10,940	11,468	11,468	4.8%
消費量	(万トン)	11,326	10,934	11,287	11,287	3.2%
搾油向け	(万トン)	9,500	9,200	9,477	9,477	3.0%
食用向け	(万トン)	1,420	1,355	1,432	1,432	5.7%
種子向け	(万トン)	76	79	78	78	▲ 1.3%
その他向け	(万トン)	330	300	300	300	0.0%
輸出量	(万トン)	6	8	15	15	87.5%
総消費量（消費量+輸出量）	(万トン)	11,332	10,942	11,302	11,302	3.3%
差引数量（総供給量-総消費量）	(万トン)	606	▲ 2	166	166	8400.0%

資料：中国農業農村部

注：年度は10月～翌9月。

需給の大幅な改善が期待されている。

なお、同年度の国内の大豆平均卸売価格は、1トン当たり5800~6000元（11万9944円~12万4080円）と引き続き高い水準での推移が見込まれている。

国産トウモロコシ価格、堅調な需要などから上昇基調

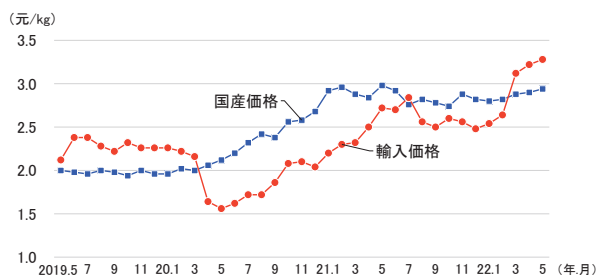
中国農業農村部は6月22日、「農産物需給動向分析月報（2022年5月）」を公表した。この中で、2022年5月の国産トウモロコシ価格は、主産地の在庫が減少する中で、安定した飼料需要などから価格は上昇基調にある（図1）。トウモロコシの仕向け割合が高い飼料生産では、豚の飼養頭数が減少傾向にあるものの、代替飼料の小麦価格の上昇からトウモロコシの使用比率が上昇と報告されている。一方で、輸入トウモロコシ価格は、ウクライナ情勢を背景とした世界的な穀物価格の上昇を受けた形で大きく反発している。また、

短期的な価格動向として、国内でのトウモロコシ生産コストの上昇や世界的な穀物相場の高騰から強含みで推移すると予想している。

主要養豚生産地である中国南部向け飼料原料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関税割当数量内：1%の関税+25%の追加関税）は、22年5月が1キログラム当たり3.28元（68円）となり、国産価格を下回っていた同年2月の価格から2割以上も上昇している。また、同月の国産トウモロコシ価格（東北部産の同港到着価格）同2.94元（61円）に比べて同0.34元（7円）高となり、3月に逆転した国産と輸入との価格差は広がっている。

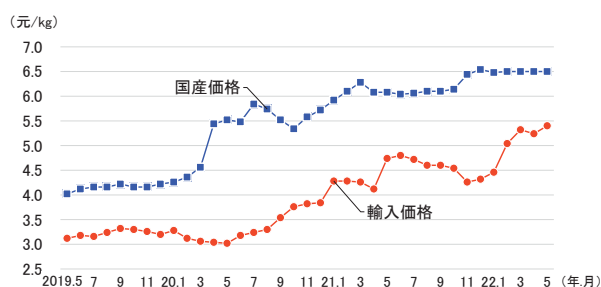
さらに、関税割当数量を超えた輸入トウモロコシ価格（65%の関税+25%の追加関税）は同5.30元（110円）と前月から同0.10元（2円）上昇し、国産トウモロコシとの価格差は同2.36元（49円）に広がっている。

図1 トウモロコシ価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
 注1：国産価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み2級黄トウモロコシ価格。
 注2：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し2級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）。

図2 大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
 注1：国産価格は、山東省入荷価格。
 注2：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格（課税後）。

国産大豆価格、国家備蓄の放出も供給量の制約から安定

主産地からの供給量は減少しており、新穀の供給が開始されるまでの間、国産大豆価格は高値安定で推移すると見込まれている。通常、この時期は、夏場を迎えて徐々に消費の端境期に入るため、一般的に市場の動きは鈍化傾向となるが、今期はCOVID-19の予防・管理措置の厳格化が輸送に影響を及ぼしていることで、供給量の制約が価格の安定につながっているとされている（図2）。

高止まりする国産大豆価格に対処するため、中国政府は22年4月以降、国家備蓄の輸入大豆の市場放出を発表し、7月1日時点で計700トンを対象に継続的な入札が行われている（落札率は非公表）。また、5月には、国家備蓄の国産大豆の市場放出を発表し、計4万200トンを対象に入札が行われ落札率は83.4%となった。これらは主に業務向けとして販売されたが、国産大豆価格の沈静化には至っていない。

各地の価格動向を見ると、主産地である黒竜江省の食用向け国産大豆平均取引価格は、5月が1キログラム当たり6.12元（127円、前年同月比5.1%高）と前月並みながらも依然として前年に比べ高い水準にある。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.50元（134円、同6.8%高）と同じく高い水準で推移している。国産大豆価格と輸入大豆との価格差は、大豆国際相場の上昇などからわずかに縮小し、同1.10元（23円）となった。

このような中で、大豆の輸入量は減少ながらも比較的高い水準で推移している。22年（1～4月）の輸入量は2837万3800トン（前年同期比0.8%減）となった。また、輸入額は世界的な穀物相場の高騰から同23.9%増の176億7900万米ドル（2兆4340億円：1米ドル＝137.68円^{（注）}）と報告されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年6月末TTS相場。

（調査情報部 横田 徹）